

学生の施設実習課題と達成感

三村 保子

(西南女学院短期大学)

I. はじめに

保育士養成課程で学ぶ学生にとって、保育実習がきわめて重要な意味をもっていることは言うまでもない。

この報告は、施設実習の課題を適切に設定することと実習の達成感との関係について考察するために、重症心身障害施設で2000年8月に10日間の実習をした保育科2年生Kの場合を事例的に検討する。

研究の方法としては、学生Kの実習日誌と実習後のアンケート用紙を合わせて検討し、事後指導としての個別面接によって聴取したことも加えて考察を試みたい。

II. 事前指導

学内における事前指導では、重症心身障害児施設の概要、重症心身障害児の特徴、療育チームにおける保育士の役割と援助・指導の内容、保育士が活動を行う際の留意点について、施設実習担当の筆者が講義を行った。重症心身障害児施設のビデオも視聴させた。

実習施設でのオリエンテーションは、実習開始3週間前に実施され、園の療育基本方針、食事介助、歯磨き介助、おむつ交換、衣服の着脱介助などに関する留意事項の指示を受けている。そして10日間担当する入所者に面会をしている。

学生Kが担当することになった入所者は「52歳の女性Aさん、小頭症、視力が弱く、ことばは出ないが発声はある。歩行困難であるが手をとって援助すると歩行可能となる。発達段階は1歳位。」であるとの情報が与えられた。

III. 実習課題と実習経過

学生Kは、Aさんに会った後、自分の実習課題を次の2点に設定した。「①ことばかけや身ぶりやスキンシップなどのコミュニケーションの工夫をし、Aさんの笑顔と発声がみられるようにしたい。②Aさんの身になった食事介助や排泄介助をしたい。」

(なお学生Kが、実習期間中に行った頻度の高い活動として、アンケート調査に答えた5つの項目は、①話し相手 ②おむつ交換 ③食事介助 ④着脱衣の介助 ⑤レクリエーション活動である。)

実習初日、学生Kは食事介助がうまくいかず苦勞し保育士の食事介助を観察して、自分のやり方の問題点に気づいている。おむつ交換に際しても、保育士の指示を求めて行っている。このようなことを、保育士から教えてもらったこととして実習日誌に、詳細に記録している。

2日目は、初日に観察した職員たちのAさんへの声かけやスキンシップを模倣しながら試みている。そしてAさんが自由活動の時、うずくまるようにして座り自分で少し身体を揺らしている様子に気づくのである。Aさんを一定のリズムで揺らしてあげると快い体験になるのではないかと考え、日誌の今後の課題欄に、Aさんの喜ぶこと、好きなことを見つけたいと記している。

3日目は、食事介助の際、楽しい雰囲気になる声かけや、Aさんに疲れが出ないよう座位保持装置の角度の調節をするなどの工夫をしたことが記されている。

4日目は、バスで園外活動に出かけ、園内では見られなかったAさんのよい表情に気づく。バスの中で「大波ですよ。小波も来ました。」と歌う調子で声かけをして、首からアゴにかけてくすぐり遊びをすると、Aさんが声をあげて笑うので、うれしくなった。この日、歩行困難なAさんの両手を取って散歩もする。また、おんぶや抱っこをしてあげるととても喜んだことが記録されている。

5日目は、自由活動の時、これまでとは異なったかわり方を工夫して、Aさんの好きなことを知りたいたくもくろむ。一緒に寝ころんでみたり、Aさんを背中に乗せて四つん這いになって室内を回りながら、手の平や首をくすぐると、Aさんは楽しそうな表情をする。くすぐる時に「コチョコチョコ」とか、蟬の声をまねて「ミーンミーン」と言ってみるとAさんが笑顔になった。リズムカルなことばかけに反応を示すことに気づくのである。

この日の実習指導者のコメント欄に「一対一でじっくりかかわっていく中で、大切なことに気づいていきますね。Aさんは充実した時間を過ごしているようです。Aさんの喜ぶ顔が見られるように、様々なチャレンジをして下さい」と記されている。

6日目、園庭の散歩につれ出し、いろいろなことを

肌で感じてもらおうと、日向で日光を浴びたり、日陰で風を感じたり、蟬の声を聞きながら、声かけをリズムミカルに反復して行う。落ちている木の葉を見せ、触らせようとしたことには興味を示さなかった。

実習指導者のコメントには「Aさんの小さな変化や表情の読み取りが大切です」とあった。

7日目、Aさんとこれまで以上に、スキンシップをとりたいと思い、握手、おんぶなどをくり返す。この日、自分が楽しくなければ相手に楽しんでもらうことはできないと気づいている。

8日目、初めて入浴介助をする。安全、衛生面の配慮に精一杯で、入浴を楽しんでもらえるような声かけの余裕がなかった。素早く、ていねいな入浴介助の難しさを実感する。

9日目、プール活動に参加。プールの中で入所者と職員が触れ合っている様子を観察し、入所者の一人ひとりの表情の異なりとそこに適したかかわり方の大切さを改めて考えている。この日、Aさんが朝食も夕食も食欲があり、声かけに笑顔で答えてくれたのでうれしかったと述べている。

10日目は、実習の最終日であるが、Kは実習日誌に次のように記している。「最初は施設生活の一日の流れにそって活動することに精一杯であり、担当のAさんや他の入所者に声かけをすることもうまくできず、とまどいや不安で一杯でした。しかし、一日一日と入所者と生活を共にしていくうちに、次第に沢山の声かけをしたり、スキンシップをとることができるようになりました。担当のAさんとのかかわりも、Aさんにどのような障害があるのか理解できるようになり、少しずつどのような接し方がよいのかがわかってきました。保育士を観察したり、教えてもらったりしながら、自分で試したり、工夫したりできるようになったのです。コミュニケーションの方法はことばだけではないことをAさんと接していて強く感じました。Aさんの喜ぶ働きかけをすると笑顔を見せてもらえました。また、Aさんは食事や排泄などにおいても、自分の意思表示が困難なので、最初のうちは困りました。しかし、どのようなわずかな表情の変化やしぐさでも、しっかりと受けとめていくことで、その人の気持ちや求めているものへ近づいていくことができるのではないかと感じました。」

実習指導者のコメントは「Aさんをあらゆる角度からよく観察し、かかわり方の工夫がなされています。この積極的なかかわり方を次のステップへつなげて下さい。」というものであった。

事後指導の個別面接の際、Kは筆者に、「Aさんが何をしたいのか、どうして欲しいのかが、少しずつわかり始めた時すごくうれしかった。Aさんとの触れ合いを通して、障害のある人への見方が変わった気がする身近な人になったといえよいか…。」と述べたことが印象的であった。

IV. 考察

この報告の学生Kにとって、以上みてきたように実習の達成感が高いと考えられる。同じ施設で同じ期間に他の3人の学生と共に実習を実施しているが、Kは4人の中では最も実習の達成感が高い学生であった。その理由を考えてみたい。

①学生Kは、重症心身障害児施設へ実習の配属先が決められた後、事前指導への取り組みが積極的であった。さらに、実習施設でのオリエンテーションの際、担当となるAさんに面会した後、自分の実習課題を前述のように適切に設定することができている。

②実習日誌に、具体的に利用者の様子と自分の言動を記録しており、自分の気づいたこと感じ考えたことが明らかにされている。自分の失敗についても率直に具体的に記し、反省がなされている。さらに毎回、今後の課題として明日への心の準備をしていることが示されている。

③同じ施設で実習した学生の中では最も地味な学生であるKは実習中、「Aさんのことをわかりたい。Aさんの笑顔を見たい。相手の立場に立って介助をしたい。」という着実な姿勢を保ちつづけ、実習指導者の助言や示唆を実習にいかすことができている。

④実習指導者のコメントが、Kの気づきや工夫をサポートするものであり、Kにとってその日の体験の意味づけ、そして次の日の動機づけとなっている。

V. 実習指導の今後の課題

①施設別の事前指導を充実させ、学生が適切な実習課題を設定できるようにすること。

②実習課題がどのように達成できたか、あるいはどうして課題を達成できなかったかを事後指導でいねいに援助すること。

③学生が達成感の高い実習体験をするためには、施設の实習指導者と一層緊密に連携を保つ努力が必要である。